

Title	高齢期の社会関係 : 日本の高齢者についての最近の研究
Author(s)	古谷野, 亘
Citation	聖学院大学論叢,21(3) : 191-200
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=903
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

高齢期の社会関係

— 日本の高齢者についての最近の研究 —

古谷野 亘

Social Relationships in Old Age:

Recent Studies of Japanese Seniors

Wataru KOYANO

Reviewed are recent studies of the social relationships of Japanese seniors. The studies show consistent findings including (a) differential roles and functions of others in the personal network of seniors, (b) gender differences in social relationships and the higher risk of social isolation in men, and (c) the importance of functional capacity and financial adequacy in sustaining social relationships. Further studies seem necessary to (i) understand conjugal relations in old age, (ii) develop research methods for easily observing dyadic relations between seniors and the others surrounding them, and (iii) fully explore the relations seniors have with others on the periphery of personal networks.

Key words: social relationship, social network, social support, elderly, family

はじめに

高齢者と他者との関係（社会関係 social relationship）は、今日に至るまで常に社会老年学の主要研究テーマのひとつであり続けている。古くは活動理論と離脱理論の論争やそれに続く主観的幸福感の要因分析において社会関係は重要な変数であり、比較的新しいところではストレスフル・ライフイベントの影響を緩和する要因として注目を集めた。日本では、高齢者の社会関係に関する研究は、家族に関する研究として始められ、後に別居の親族や近隣、友人なども視野に入れた社会関係の研究へと発展してきた^{1, 2)}。

本稿においては、最近10年ほどの間に主要な学術誌に掲載された論文を中心に、日本の高齢者の社会関係に関する実証研究をレビューし、研究の現状と課題についていくらかの考察を試みることにする。

1. 高齢期家族の研究

高齢期の家族に関する研究については、湯沢³⁾が終戦から1960年代末まで、樽川⁴⁾が1970年代末まで、横山・古谷野⁵⁾が1992年までの研究をレビューしている。樽川によれば、高齢期の家族に関する研究は、家族制度や集団としての家族の視点から老親扶養の問題を取りあげたものがほとんどであった。1980年代は、1970年代までの研究の延長線上に位置づけられる研究と並んで研究関心の多様化が進んだ時期であり、前者の代表が既婚子との同・別居に関する研究であった⁵⁾。しかし最近では、家族制度や集団としての家族の視点から離れ、「個としての高齢者による家族の再構築」^{6,7)}や、「社会的ネットワークとしての家族」⁸⁾の視点から“もっとも身近な他人”である家族との関係を検討することの重要性が強調されるようになってきている。

最近10年間に主要学術誌に発表された高齢期家族に関する研究では、既婚子との同・別居を主題とするものはすっかり影をひそめ、既婚子との同居をもたらす要因としてかつて重視されていた家(イエ)制度の規範や意識への言及もみられなくなっている。前田⁹⁾によれば、同居率は自営業者と住宅資源の豊かな人で高く、住宅資源の豊かな人では別居子との接触も頻繁である。同様の知見は原田ら¹⁰⁾によっても報告されており、住宅資源の豊かな人では同居率が高く、近距離親族・友人も多い。これらの知見は、既婚子との同・別居が家制度の規範や意識とは無関係に、所与の条件の下での便宜を基準として合理的に決定されているという直井ら¹¹⁾の指摘につながる。

同・別居への関心が薄れ、家制度の規範や意識への言及がみられなくなったのは、既婚子との同居が高齢期の家族の最頻的なパターンでなくなり、家意識が日常生活でほとんど意味をもたなくなった現実を反映したものである。西村ら¹²⁾によれば、家制度の下で当然とされていた空間と家計と食事の共同を実践している人は、現在では、既婚子と同居している高齢者の中でも半数程度でしかない。

既婚子との同・別居に代わって頻繁に取りあげられるようになったのが、家族と呼ばれる他者との関係である。古谷野ら¹³⁾によれば、子どもの配偶者(嫁・婿)に比べて子ども(娘・息子)、男性(息子・婿)に比べて女性(娘・嫁)は老親との密接な関係を有し、手段的サポートの授受は近くに居住する子どもおよび子どもの配偶者との間で多い。サポートの授受と同伴行動についてみると、同居と別居は質的に異なるものではなく、同居は地理的近接性の一水準である。直井ら¹⁴⁾によれば、夫と死別した女性高齢者が子どもから受けるサポートは、子どもが夫の不動産を相続したかどうかとは無関係で、サポートの受領には子どもの地理的近接性の影響の方が大きい。田原・荒井¹⁵⁾によれば、別居子との対面接触が保たれるためには距離が重要であって、別居子が月に1回以上老親宅を訪問するためには半日程度、年に数回以上訪問するためには1～2日程度で往復できる範囲に居住していることが必要である。

水嶋¹⁶⁾によれば、女性高齢者は子どもを含むさまざまな他者との間で相互依存的なネットワークを形成しており、自分のライフスタイルに合わせて子どもとの関係を操作している。また、自己承認欲求を受けとめてくれる他者との間に選択的に親しい関係を作り、情緒的承認を伴うサポートを得ている。そのような他者は、必ずしも実子に限定されない「娘的存在」である¹⁷⁾。中西¹⁸⁾によれば、母親と娘の情緒的な親密さには、経済水準や同・別居よりも、母娘のライフコースの類似性が大きな影響を及ぼす。

これまでの高齢期の家族に関する研究では、親子の関係にのみ関心が向かい、夫婦関係についての体系的な研究は少ない⁸⁾。そのような中で、佐藤¹⁹⁾は中高年有配偶女性の家族に対する認知の11年間の変化を報告している。佐藤によれば、妻が夫を理解していると思う程度と夫を頼りにする程度に有意な経年変化はなく、他の家族員の誰よりも夫を理解し、頼りにしている。長津²⁰⁾によれば、夫婦いずれにとってもネットワーク規模が大きく、夫婦単位で付き合いのある他者が多いことは夫婦の情緒的統合度を高めるが、ネットワークに占める親族の割合が高いことは妻が感じる夫婦の情緒的統合度を低める。また片桐・菅原²¹⁾によれば、夫の社会参加活動は、夫が無職の場合には妻の生活満足度を高めるが、夫が有職の場合には低める傾向がある。

兄弟姉妹との関係を取りあげた研究は吉原^{22, 23)}のみであり、幼い頃の関わりの程度とライフイベントが兄弟姉妹間の関係に影響し、さらにさまざまな要因の累積的・加重的な相互作用がみられるとされている。しかし、少数例の事例研究であって、他に兄弟姉妹の関係を扱った研究がないことから、どの程度一般化できる知見が得られているかの判断は難しい。

2. 他者の選択機序

日本で集団や制度としての家族という前提から離れて高齢者の家族関係が取りあげられるようになったのは比較的最近のことであるが、配偶者や子どもを、近隣や友人などとともに高齢者個人のネットワーク上に位置づけ、家族の相対的位置と重要性について検討することが、すでに研究上不自然なことではなくなってきた⁸⁾。同居家族との関係が、それ以外の他者との関係と同一次元で比較されるようになった転機は、ソーシャル・サポートとソーシャル・ネットワークの概念を紹介し、ソーシャル・サポートの測定法を提案した野口²⁴⁾であった。

日本の高齢者の社会関係が家族を中心に構成され、高齢者にとって家族が重要なサポートの源泉であることは広く認められている^{25~36)}。たとえばKoyano, et al.²⁷⁾によれば、同居家族と別居子は提供者の負担が重い手段的サポートをも提供でき、しかも健康度や社会経済的地位などの影響を受けにくい安定したサポートの源泉である。同居家族はあらゆる種類のサポートを提供できる「百貨店型」のサポートの源泉である^{35, 37)}。

近隣や友人は、手段的サポートの源泉になることは少ないが、情緒的サポートの源泉とはなりう

高齢期の社会関係

る^{25-32, 34-38)}。たとえば西村ら³⁸⁾によれば、日常的な接触と関心の共有を必要とする「交遊」では非親族である友人・知人が選択されることが多いのに対して、関与と負担を必要とする「信頼」と「相談」では親族、とりわけ配偶者や子どもが選択される。平野²⁹⁾によれば、近隣は話をする、日常的にともに親しむといった情緒面での交流と同伴行動を楽しむ相手であり、緊急時のサポートは子どもや親戚によって提供される。また権ら³⁹⁾によれば、サポートの源泉としては家族やフォーマルサポートが好まれ、近隣や友人、親戚が選ばれることは少ない。このような手段のサポートの選好に地域差はみられないが、大都市より地方都市の高齢者で家族への選好度が高い⁴⁰⁾。

大塚・牧田³⁴⁾によれば、過疎地の高齢者ではサポートの授受は主として同居家族との間で行われ、同居家族が必要なサポートを提供できない場合に、別居子、親戚、近隣、友人、公私の機関・団体からのサポートが選択される。小林ら⁴¹⁾によれば、無配偶の高齢者は有配偶者より友人等との接触頻度が高い。また、無配偶者や子どもが遠くに住む人ほど友人・近隣がサポートの源泉となっており、子どものいない人では親戚がサポートの源泉になる傾向がある。これらの知見はサポートの源泉に関する階層的補完モデル⁴²⁾を支持する。ただし、続柄によって提供できるサポートが異なるため、課題特定性⁴³⁾が優先される。たとえば石田⁴⁴⁾によれば、漁村のひとり暮らし高齢者では、親族と近隣が会話や簡単な身の回りの世話といった日常生活レベルでの孤独や不便をカバーしている。しかし、身体介護等の手段のサポートの提供は子どもとその配偶者に限られ、親族による代替はなされない。そのため、子どもがいなかったり遠方にいる人は施設介護や介護サービスを選択する。野邊³⁵⁾によれば、サポートの源泉には同居家族－別居子とその配偶者－親戚－近隣・友人という階層的序列が存在し、優先順位の高い他者が十分なサポートを提供できないときに下位の他者が選択される。ただし、近隣と友人が提供するの情緒的サポートである。古谷野ら⁴⁵⁾によれば、階層的な補完関係は配偶者と配偶者以外の同居家族の間にのみ認められ、別居子や非親族にまでは及ばない。

3. 社会関係の構造

古谷野ら⁴⁶⁾によれば、同居家族と別居子を除くと、都市の男性高齢者が関係を有する他者のほとんどは同性の友人で、同年輩の人が多く。他者の多くは「共通の話題」のある人、「気心の知れた」人であって、情緒的な交流では子どもや子どもの配偶者と同等もしくはそれ以上の位置にある。地方都市の高齢者でも、同居家族と別居子を除くと、「気心の知れた」人の多くは同性・同年輩の友人であって、比較的近くに住み、頻繁に会っている人が多い⁴⁷⁾。浅川ら⁴⁸⁾によれば、高齢者と他者との関係には「サポート」と「情緒的一体感」という2つの相互に関連する次元がある。情緒的一体感を感じる他者はサポートの授受のある他者より多く、情緒的一体感を感じる他者の一部との間でサポートの授受が行われている。それゆえ、「サポート」より「情緒的一体感」の方がより基

礎的な社会関係の次元である。情緒的一体感を欠いたままサポートの授受を行うという不自然な人間関係から生まれるのが「嫁と姑の葛藤」である²⁵⁾。

高齢者の社会関係に性差があることは多くの研究で認められている。地方都市の高齢者の場合、「気心が知れた」人の数に性差はないが、そのような人はいないとする人の割合は女性より男性で高い⁴⁷⁾。男性のソーシャル・ネットワークが配偶者中心であるのに対して^{31,38)}、女性のネットワークの構成は多様で、必要に応じてさまざまな続柄の他者からサポートを得ることができる^{31,38,49)}。そのため、女性に比べて男性では、配偶者の喪失がネットワークの縮小に直結する可能性が高く³⁸⁾、ひとり暮らしの男性高齢者にとっては、他者との関係を形成していく「関係能力」が重要な生活課題となる⁵⁰⁾。

社会関係の豊かさにはさまざまな要因が影響することが報告されている。たとえば、生活機能の高い人^{26~28,41,45~47,51~54)}、社会経済的地位の高い人^{10,26~28,41,45,46,51,52)}、豊かな住宅資源を有する人^{9,10)}、現在地居住歴の長い人^{27,47,52)}ほど社会関係が豊かである。ただし、学歴は近隣との関係に負の影響を及ぼし^{27,52)}、現在地居住歴は近隣以外の友人関係に負の影響を及ぼす²⁸⁾との報告もあるので、関連要因の影響は他者の続柄によって異なると考えるべきである。Asakawa, et al.⁵⁴⁾によれば、生活機能の低下を経験した高齢者では社会関係の減少が認められ、生活機能を維持した人とは経年変化が有意に異なる。

広田⁵⁵⁾と澤岡ら⁵⁶⁾は、社会関係の態様から高齢者の類型化を行っている。広田によれば、農村の高齢者には親族中心の密接なコミュニケーション・ネットワークをもつ人が多いが、その中に親族以外とはほとんどコミュニケーションのない「家族依存型」、親族以外ともコミュニケーションをもつ「地域開放型」、親族とは儀礼的な関係のみを保つ「近隣自己充足型」、親族とのコミュニケーションのない「孤立型」という4つの類型がある。澤岡ら⁵⁶⁾によれば、都市の高齢者にはサポートの源泉が親族と近隣のみに限られる「RN型」と、親族・近隣以外からもサポートを得ている「SN型」、誰からもサポート受けない「孤立型」があり、友人ネットワークの規模と地理的近接性、携帯電話の使用に類型間の差がある。しかし、日本の高齢者の社会関係に関する研究の中で類型論は少なく、類型間にみられる基本属性の差や出現頻度など未解明の課題が少なくない。

4. 社会関係の形成

平野ら⁵⁷⁾によれば、東京都内3地域の高齢者では、いずれの地域でも「仕事の関係」「学校の関係」「趣味、地域活動」で知り合った友人が多い。古谷野ら⁴⁶⁾によれば、「つきあいのある」他者の多くは、職場や学校で知り合った後、長い交流の歴史をもつ人である。地方都市の高齢者では、他者と知り合ったきっかけは近隣、学校、職場の順で多く⁴⁷⁾、大都市の男性高齢者では近隣で知り合った他者がほとんどいないのとは対照的である。野辺³¹⁾によれば、男性高齢者が職場の仲間との関

係を多く有しているのに対し、女性では近隣との関係が多い。前田⁴⁹⁾によれば、友人関係形成の文脈は女性の方が多様であって、男性では仕事を通して形成された友人関係が主であるが、女性は必要に応じてさまざまな文脈から支援を得ている。友人関係の継続期間は男性の方が長く、友人になってからの期間が長いと情緒的な機能を果たすようになる。

矢部⁵⁸⁾によれば、「つきあいのある」人の半数には関係の重複、すなわち知り合った後に作られた、知り合った契機とは別の関係の重なりが認められる。趣味や飲食店等の常連であることは、社会関係の発生の契機としては重要でないが、関係継続の契機としては重要である。関係の重複が多い他者ほど情緒的に親密で、家族ぐるみの付き合いをしたり、手段的サポートの提供者になることが多い⁵⁹⁾。

齋藤⁶⁰⁾によれば、東北の農・漁村の習慣である「お茶飲み」には友人、近隣、知人からのサポートを得やすくする機能がある。また菅原・片桐⁶¹⁾によれば、都市の中高齢者の約半数が何らかの集団活動に所属しており、その多くがメンバーとの親しい関係をもっている。活動への関与度が高いほどメンバー全体との関係がよく、全体との関係がよい人ほど個々のメンバーとの情緒的な親密さが高く、活動外での接触も多い。

5. 到達点と今後の課題

高齢者の社会関係に関する研究には、主観的幸福感など他の変数に影響する要因としての重要性によって支えられてきた面がある。最近10年ほどの間に発表された研究の中にも、主観的幸福感^{29, 33, 52, 62~68)}、抑うつ傾向^{68~71)}、社会参加⁷²⁾、生命予後⁷³⁾に対する社会関係の影響を報告しているものが多い。しかしこの時期は、社会関係そのものについての関心が高まり、社会関係の態様に関する研究が進められた時期でもあった。

これまでみてきたように、最近の研究からはいくつかのほぼ確実な知見が得られている。たとえば続柄による関係の相違である。同居家族はあらゆる種類のサポートを提供できる確実なサポートの源泉であり、それに続くのが別居子である。友人や近隣が手段的サポートの源泉となることは少ないが、情緒的なつながりの面では、子どもや子どもの配偶者より重要なことがある。これらのことから、高齢者の社会関係における階層的補完と課題特定性に関する理解が深められてきた。また、社会関係の態様に性差があって、男性で社会的孤立の危険性が高いこと、社会関係の維持に生活機能と経済水準が重要なこともほぼ確実な知見であるといつてよい。

しかし、残されている研究課題も多い。その第一は、配偶者との関係である。配偶者はもっとも身近な他者であり、もっとも確実なサポートの源泉でもある。寿命の伸びと同居率の低下により配偶者との関係はますますその重要性を増しているが、体系的な研究はほとんどなされていない⁸⁾。配偶者との関係に焦点を合わせた高齢期の家族関係に関する研究が、今後一層進められる必要がある。

る。

家族と呼ばれる他者たちの間でも高齢者との関係が一様でないことは、最近の研究を通して明らかにされた重要な知見のひとつである。この自明の事実がデータによって示されえた背景には、高齢者と家族との関係を一对の個人間の関係（タイ tie；紐帯）としてとらえ、日常的な交流を明らかにできるようになったことがある。これによって、嫁と姑の葛藤が親しさを欠いたままサポートの授受を行うという不自然な人間関係から生じること²⁵⁾や、老親との関係が子どもの属性によっても影響されること¹³⁾が明らかにされている。

他者との関係は基本的に一对の個人間の関係であるから、社会関係を精密に把握するためには1人ひとりの他者との間のタイを単位として分析することが必要であり、特に他者の属性の影響を析出しようとする際にはタイを単位とすることが必須である。タイではなく高齢者個人（ケース case）を単位としたのでは、まとめあげる（aggregate）という操作によって多くの情報が失われ、社会関係の態様が誤って把握される可能性が高い⁷⁴⁾。しかし、タイ単位の分析を行うには、データ収集のための煩瑣で膨大な調査が必要であり、その実施は非常に困難である。簡便で精密な社会関係の把握方法を開発することは今後に残された第二の課題である。

第三の課題は、友人・知人など個人のネットワークの周縁部（periphery）に位置する他者との関係の解明である。日本の高齢者の友人・知人との関係に関する研究はきわめて少ない。その背景には、実際に高齢者の社会関係が家族中心であることに加えて、非親族関係に関する研究に特有の難しさがある。家族・親族との関係を取り上げる場合には関係成立の契機を問う必要はないし、関係継続の理由を説明する必要もない。しかし、非親族との関係の場合には、関係成立の契機や、関係の継続・発展に寄与した要因の解明から始める必要がある⁷⁵⁾。非親族との関係の成立や継続・発展に関する研究は最近着手されたばかりである。

さらに、ネットワークの周縁部に位置する他者の中には、「友人」や「仲間」とも呼びがたい、たとえば「顔見知り」程度の他者がいる。このような他者との関係は、きわめて部分的で移ろいやすく、その続柄をどのように呼ぶのがよいかも定かではない。そのため従来の調査・研究方法では把握することが困難であって、これまでほとんど研究されていない。

一般に、高齢期における社会関係の縮小が問題にされるときに暗黙のうちに想定されているのは、家族・親族との関係ではなく、ネットワーク周縁部の他者との関係である。従来の方法とは異なる調査・研究方法の開発を進めつつ、ネットワーク周縁部に位置する他者との関係を把握し、分析することは、豊かな高齢期の設計のために不可欠な作業である。

【引用文献】

- 1) 直井道子：幸福に老いるために：家族と福祉のサポート。勁草書房，東京（2001）。
- 2) 浅川達人：人間関係をとらえる。（古谷野亘，安藤孝敏編）新社会老年学；シニアライフのゆくえ，109-122，ワールドプランニング，東京（2003）。
- 3) 湯沢雍彦：家族における老人（1）：日本の場合。（山室周平，姫岡勤編）現代家族の社会学；成果と課題，101-116，培風館，東京（1970）。
- 4) 樽川典子：老年期の家族役割と夫婦関係。（副田義也編）日本文化と老年世代，149-194，中央法規出版，東京（1984）。
- 5) 横山博子，古谷野亘：老年期の家族に関する研究；80年代の動向と今後の展望。家族関係学，12：73-79（1993）。
- 6) 安達正嗣：高齢期家族の社会学。世界思想社，京都（1999）。
- 7) 安達正嗣：高齢期における家族再構築；家族社会学の視点の再検討。家族関係学，20：33-40，（2001）。
- 8) 西村昌記：高齢期の家族。（古谷野亘，安藤孝敏編）新社会老年学；シニアライフのゆくえ，122-132，ワールドプランニング，東京（2003）。
- 9) 前田尚子：大都市インナーエリア高齢者の世代間関係。家族社会学研究，11：83-94（1999）。
- 10) 原田謙，浅川達人，斎藤民ほか：インナーシティにおける後期高齢者のパーソナル・ネットワークと社会階層。老年社会科学，25：291-301（2003）。
- 11) 直井道子，岡村清子，林廓子：老人との同別居の現状と今後の動向；主婦を対象とした調査結果からの検討。社会老年学，21：3-21（1984）。
- 12) 西村昌記，古谷野亘，石橋智昭ほか：既婚同居世帯における世代間の生活の共同・分離。厚生指標，48（11）：28-33（2001）。
- 13) 古谷野亘，岡村清子，安藤孝敏ほか：老親子関係に影響する子ども側の要因；親子のタイを分析単位として。老年社会科学，16：136-145（1995）。
- 14) 直井道子，小林江里香，Liang J：子どもからのサポートと遺産相続；夫と死別した女性高齢者の場合。老年社会科学，28：21-28（2006）。
- 15) 田原裕子，荒井良雄：農山村地域における老親子関係と空間的距離。老年社会科学，21：26-38（1999）。
- 16) 水嶋陽子：高齢女性と選択的親子関係。家族社会学研究，10：83-94（1998）。
- 17) 水嶋陽子：老年期親子における交渉と親しい関係。家族研究年報，27：63-74（2002）。
- 18) 中西泰子：母娘関係の親密さとその規定要因；娘のライフコース志向と母親ライフコースの類似性に注目して。家族関係学，25：35-47（2006）。
- 19) 佐藤宏子：農村の中高年齢有配偶女性における主観的家族関係の追跡研究；「理解」と「頼り」の認知からみた情緒関係。老年社会科学，22：343-356（2000）。
- 20) 長津美代子：中高年齢におけるパーソナル・ネットワークと夫婦の情緒的統合およびウェルビーイング。日本家政学会誌，55：121-133（2004）。
- 21) 片桐恵子，菅原育子：定年退職者の社会参加活動と夫婦関係；夫の社会参加活動が妻の主観的幸福感に与える効果。老年社会科学，29：392-402（2007）。
- 22) 吉原千賀：高齢期におけるきょうだい関係；活性化とその要因。家族社会学研究，15：37-47（2003）。
- 23) 吉原千賀：長寿社会における高齢期きょうだい関係の家族社会学的研究。学文社，東京（2006）。
- 24) 野口裕二：高齢者のソーシャル・サポート；その概念と測定。社会老年学，34：37-48（1991）。
- 25) Koyano W: Filial piety and intergenerational solidarity in Japan. *Australian Journal on Ageing*, 15: 51-56 (1996).
- 26) 野辺政雄，田中宏二：地方都市における既婚女性の社会的ネットワークの構造。社会心理学研究，10：217-227（1994）。
- 27) Koyano W, Hashimoto M, Fukawa T, et al.: The social support system of the Japanese elderly. *Journal of Cross-Cultural Gerontology*, 9: 323-333 (1994).
- 28) 野辺政雄：地方都市における高齢女性の社会的ネットワーク；排出期の女性との比較。日本都市社

- 会学会年報, 15: 83-100 (1997).
- 29) 平野順子：都市居住高齢者のソーシャルサポート授受；家族類型別モラルへの影響. 家族社会学研究, 10: 95-110 (1998).
- 30) 平野順子：地域における高齢者のソーシャル・サポート；東京都台東区を事例として. 家族関係学, 17: 93-103 (1998).
- 31) 野辺政雄：高齢者の社会的ネットワークとソーシャル・サポートの性別による違いについて. 社会学評論, 50: 375-392 (1999).
- 32) Kendig H, Koyano W, Asakawa T, et al.: Social support of older people in Australia and Japan. *Ageing and Society*, 19: 185-207 (1999).
- 33) 金恵京, 甲斐一郎, 久田満ほか：農村在宅高齢者におけるソーシャルサポート授受と主観的幸福感. 老年社会科学, 22: 395-404 (2000).
- 34) 大塚洋子, 牧田実：過疎地域におけるソーシャル・サポートネットワークと社会的資源. 家族関係学, 23: 61-77 (2004).
- 35) 野邊政雄：地方小都市に住む高齢女性の社会関係における階層的補完性. 社会心理学研究, 21: 116-132 (2005).
- 36) 野邊政雄：高齢女性のパーソナル・ネットワーク. 御茶の水書房, 東京 (2006).
- 37) 前田尚子：非親族からのソーシャルサポート. (折茂肇ほか編) 新老年学 (第2版), 1405-1415, 東京大学出版会, 東京 (1999).
- 38) 西村昌記, 石橋智昭, 山田ゆかりほか：高齢期における親しい関係；「交遊」「相談」「信頼」の対象としての他者の選択. 老年社会科学, 22: 367-374 (2000).
- 39) 権滋珠, 岡田進一, 白澤政和：大都市在宅高齢者のソーシャルサポート源に対する選好度の特徴；手段的サポートと情緒的サポートにおける類似点と相違点. 社会福祉学, 44(3) : 52-61 (2004).
- 40) 権滋珠：中都市在住高齢者の手段的ソーシャルサポート選好度とその構造；大都市在住高齢者との比較の視点に基づいた考察. 厚生指標, 54(2) : 1-6 (2007).
- 41) 小林江里香, 杉原陽子, 深谷太郎ほか：配偶者の有無と子どもとの距離が高齢者の友人・近隣ネットワークの構造・機能に及ぼす効果. 老年社会科学, 26: 438-450 (2005).
- 42) Cantor MH: Neighbors and friends; An over-looked resource in the informal support system. *Research on Aging*, 1: 434-463 (1979).
- 43) Litwak E: *Helping the Elderly; The Complementary Roles of Informal Networks and Formal Systems*. Guilford Press, N.Y. (1985).
- 44) 石田路子：単身高齢者の生活支援と親族ネットワーク；漁村における親族ネットワーク機能の変化から. 日本の地域福祉, 14: 58-70 (2000).
- 45) 古谷野亘, 安藤孝敏, 浅川達人ほか：地域老人の社会関係にみられる階層的補完. 老年社会科学, 19: 140-150 (1998).
- 46) 古谷野亘, 西村昌記, 安藤孝敏ほか：都市男性高齢者の社会関係. 老年社会科学, 22: 83-88 (2000).
- 47) 古谷野亘, 矢部拓也, 西村昌記ほか：地方都市における高齢者の社会関係；気心が知れた他者の特性. 老年社会科学, 29: 58-64 (2007).
- 48) 浅川達人, 古谷野亘, 安藤孝敏ほか：高齢者の社会関係の構造と量. 老年社会科学, 21: 329-338 (1999).
- 49) 前田尚子：友人関係のジェンダー差；ライフコースの視点から. 老年社会科学, 26: 320-329 (2005).
- 50) 西村昌記：一人暮らし高齢者の生活課題；サポート・ネットワークの観点から. 老年精神医学雑誌, 15: 184-191 (2004).
- 51) Koyano W, Okamura K, Ando T, et al.: The effects of functional health status on the everyday life of older people in Japan. *Australian Journal on Ageing*, 14: 8-11 (1995).
- 52) 古谷野亘, 岡村清子, 安藤孝敏ほか：都市中高年の主観的幸福感と社会関係に関連する要因. 老年社会科学, 16: 115-124 (1995).
- 53) 杉澤秀博, 岡林秀樹, 中谷陽明ほか：高齢者の生活と健康に関する日米比較；(第2報) 社会関係に

高齢期の社会関係

- 着目して. 厚生 の指標, 45 (6) : 23-29 (1998).
- 54) Asakawa T, Koyano W, Ando T, et al.: Effects of functional decline on quality of life among the Japanese elderly. *International Journal of Aging and Human Development*, 50: 319-328 (2000).
- 55) 広田すみれ: 農村居住高齢者のコミュニケーション・ネットワークの分析. *社会心理学研究*, 19: 104-115 (2003).
- 56) 澤岡詩野, 福尾健司, 浜田知久馬: 都市高齢者のネットワークタイプによる友人との交流媒体としての携帯電話の利用状況. *老年社会科学*, 28: 12-20 (2006).
- 57) 平野順子, 工藤由貴子, 袖井孝子: 高齢者と都市の生活環境 (第2報): 地域特性とソーシャルネットワーク. *日本家政学会誌*, 49: 1209-1216 (1998).
- 58) 矢部拓也, 西村昌記, 浅川達人ほか: 都市男性高齢者における社会関係の形成; 「知り合ったきっかけ」と「その後の経過」. *老年社会科学*, 24: 319-326 (2002).
- 59) 古谷野亘, 西村昌記, 矢部拓也ほか: 関係の重複が他者との交流に及ぼす影響; 都市男性高齢者の社会関係. *老年社会科学*, 27: 17-23 (2005).
- 60) 齋藤美華, 小林淳子, 服部ユカリ: 前期高齢者の「お茶飲み」がソーシャル・サポートと主観的幸福感および交流の充実感に及ぼす影響. *日本地域看護学会誌*, 7 (2) : 41-47 (2005).
- 61) 菅原育子, 片桐恵子: 中高年者の社会参加活動における人間関係; 親しさとその関連要因の検討. *老年社会科学*, 29: 355-365 (2007).
- 62) 野辺政雄: 地方都市に住む高齢女性の主観的幸福感. *理論と方法*, 14: 105-123 (1999).
- 63) 中嶋和夫, 香川幸次郎: 高齢者の社会支援と主観的 QOL の関係. *社会福祉学*, 39 (2) : 48-61 (1999).
- 64) 川本龍一, 土井貴明, 山田明弘ほか: 山間地域に在住する高齢者の主観的幸福感と背景因子に関する研究. *日本老年医学会雑誌*, 36: 861-867 (1999).
- 65) 金恵京, 杉澤秀博, 岡林秀樹ほか: 高齢者のソーシャル・サポートと生活満足度に関する縦断研究. *日本公衆衛生雑誌*, 46: 532-541 (1999).
- 66) 柳澤理子, 馬場雄司, 伊藤千代子ほか: 家族および家族外からのソーシャル・サポートと高齢者の心理的 QOL との関連. *日本公衆衛生雑誌*, 49: 766-773 (2002).
- 67) 宮島ひとみ, 別所遊子, 細谷たき子: 配偶者と死別した高齢女性の生活満足度に影響を与える要因. *日本地域看護学会誌*, 7: 23-28 (2004).
- 68) 原田謙, 杉澤秀博, 浅川達人, 斎藤民: 大都市部における後期高齢者の社会的ネットワークと精神的健康. *社会学評論*, 55: 434-448 (2005).
- 69) 川本龍一, 土井貴明, 山田明弘ほか: 山間地域に在住する高齢者の抑うつ状態と背景因子に関する研究. *日本老年医学会雑誌*, 36: 703-710 (1999).
- 70) 小泉弥生, 栗田圭一, 関徹ほか: 都市在住の高齢者におけるソーシャル・サポートと抑うつ症状の関連性. *日本老年医学会雑誌*, 41: 426-433 (2004).
- 71) Okabayashi H, Liang J, Krause N, et al.: Mental health among older adults in Japan; Do sources of social support and negative interaction make a difference? *Social Science and Medicine*, 59: 2259-2270 (2004).
- 72) 安田節之: 大都市近郊の団地における高齢者の人間関係量と地域参加. *老年社会科学*, 28: 450-463 (2007).
- 73) 岡戸順一, 星且二: 社会的ネットワークが高齢者の生命予後に及ぼす影響. *厚生 の指標*, 49 (10): 19-23 (2002).
- 74) 古谷野亘, 岡村清子, 安藤孝敏ほか: 社会関係における分析単位の問題; ケース単位の分析とタイ単位の分析. *老年社会科学*, 16: 11-18 (1994).
- 75) 浅川達人: 近隣と友人. (古谷野亘, 安藤孝敏編) *新社会老年学: シニアライフのゆくえ*, 133-138, ワールドプランニング, 東京 (2003).